注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
八神はやての恋愛事情

【作者名】
黒ウサギ

【あらすじ】
八神はやて、恋をしました

八神はやての恋愛事情

うちがあの人の事を気になり出したのは何時頃からだっただろうか…

初めて見かけた時に思ったのは真面目な雰囲気。でも彼は余り他者との関わりを持とうとしなかった。ゲンヤさんの所で部隊長としてのアレやこれを扱かれていた時、彼と接した事がある。親しみやすく、でも何処か遠慮のある接し方。そんな彼を私はどうしようもなく気になっていた。

六課が編成され、なのはちゃんやフェイトちゃんを同じ部隊に招き入れ。ヴォルケンリッター、うちの大切な家族たち、新人達、多くの人たちに支えられながら部隊長として頑張っていたある日

「はやて？いきなり立ち止まってどうしたの？」

クラナガンに三人で出かけて、評判の高いケーキ屋に入り、なのはちゃんの実家である翠屋のケーキとの味の比較を面白おかしく聞いていた時、私はまた彼に出会ってしまった。

不意に心臓が跳ねる。フェイトちゃんになのはちゃんが急に黙り込んでしまった私に声をかけてくれているが、申し訳ないがそれどころでは無い。鼓動が早い、頬が熱い。喉もカラカラと渇きコップの水を飲み喉を潤す。それでもうちの視線は彼から離れることは無かった。

彼は私服姿で雑貨屋で店員と談笑している。その手には既に買い物が終わったのか丁寧にラッピングされた紙袋を持っていた。

（彼女へのプレゼントやろか…）

そんな考えが脳裏をよぎる。なんだろうか、モヤモヤする。話しかけに行くべきか、いやしかし彼との会話はそれ程多くは無かった。本

当に世間話をするぐらいで、街中で久しぶりに再会したからといって声を掛けるのも如何なものか…

そんな風に一人で悩んでいると彼が店員に別れを告げお店を立ち去るのが見えた。音を立て椅子から立ち上がる。驚いた二人が何事かと私の視線が注がれているものに気がつき

「はやてちゃん、あの男に人がどうかしたの？」

確かにこれだけ見ていれば彼と何かあったか感づくだろう。まぁ特に何も無いのだが…

「いーや、なんでもあらへんよ。ただ久しぶりにおうたから声かけるべきかなーって悩んどっただけや」

ケラケラと笑いながら二人に視線を戻すと、何だろうが。二人してニヤニヤと悪どい笑みを浮かべている

「もしかして、はやての意中の人なのかな？」

フェイトちゃんから、爆弾とも言える言葉が投下され、なのはちゃんはキャーと黄色い声を上げながら頬に手を当て体をくねくねと動かしている。そのリアクションにお前は何時の人間だと小一時間程問い詰めたくなる。

しかしフェイトちゃんのその言葉に、うちは何も言えずにただ立ち尽くすだけ。その反応が余計に怪しかったようでうちは二人に質問責めされることになった。

気がつけば彼は何処にもおらず、ただうちの心には寂しさだけが残されていた。

それからまた月日が経ち、新人達の出動も終わりゆっくりした時間を久しぶりに謳歌すべく一人でクラナガンにやって来たある日

「姉ちゃん随分と色っぽい体してるじゃーん。どう？俺とお茶でも飲みに行かない？」

ナンパである。ぶらぶらと、特に目的もなくクラナガンを歩いていたら突然声をかけられた。自画自賛になるがうちはそれ程悪くはないスタイルであり、顔も…まぁ整っている方だとは思っている。まぁだからと言って目の前の軽薄そうな男にホイホイと着いて行く程軽い女では無い。着いて行ったら最後、お茶以外のナニかまで飲まされてしまう。地球にある薄い本では大体そんな感じや。

「すんません、うちこれから友達と出掛ける予定あるんで…」

無難な、それでいて相手を刺激しないように断ったのだか相手は諦めずにうちの腕を掴み逃がそうとはしなかった。

その握る力が強く、顔が痛みに歪む。例え部隊長であろうとそこはか弱い女の子。男性の筋力で掴まれてしまえばうちの体は当然悲鳴を上げる。

「あ、あの。私の連れが何かしましたでしょうか」

その声に私の心臓が大きく跳ねる。

声のする方を向けば彼がいた。その顔は少し怯えているようにも

見え、しかしその目はとても真剣な眼差し。そんな彼を見て私の心臓はどくんどくんと血液をこれでもかと体に循環させている。

「くそ、友達って男のことかよ…」

私の腕を掴んでいた男は吐き捨てるようにして去って行く。なんとも諦めの早いことで…

「大丈夫ですか？八神さん」

名前を、覚えていてくれた。

たったそれだけのことで顔が赤く染まり。私の心は幸せで満たされて行く。

何時までも返事を返さない私に、何を思ったのか彼は頭をぽんぽんと優しく、子供をあやすように軽く叩き出した。

「八神さんは綺麗ですからね、あんな風にナンパされることもあるんでしょうね。怖かったでしょうに…、腕を掴まれて声を出そうにも出せなくて…」

いや違うんです、本当はバインドするまで五秒前くらいでした。とは言えるわけが無いし言うつもりもない。

あうあうとらしくない声を上げながらされるがままに頭を弄られている。

これはどんなテンプレであろうか。ナンパされ、怯え、助けられ、頭を弄られる。テンプレ通りすぎて最近では小説でもこんな流れにはならないであろう。しかしそんなテンプレを心地よく思っているうちがいる。

垂れる前髪から、上目遣いで彼の顔を見ると何処か不安そうにしていた。それと同時に私の頭から彼の手が離れる。

あっ、と声を漏らす。離れた頭には何か寂しさがある

「すいません、馴れ馴れしくしてしまって…。」

当然である。何時まで経ってもマトモな反応をしなければ不安にもなるだろう。

「ちゃ、ちゃいます！嫌とかそんなんじゃなくて…」

大きな声で否定してしまう自分に驚きながらも

「助かりました、ありがとうございます…」

お礼を告げる。

彼は良かったと言うと、微笑んでいた。

その笑顔を見て私は確信した。

ーーこれはきっと恋である

八神はやて人生初の恋だ。初恋だ

自覚してしまいさらに顔が赤く染まる。変な子に思われていないだろうか？などと心配までしてしまう

「怪我もなさそうですし、大丈夫なようですね。それでは八神さん、また何処かで」

そう、告げて彼は去ろうとした。

連絡先も知らない。名前しか知らない。

今度は何時会うことができる？偶然で会うことがどれ程難しい？

神様は不公平なのだ、そんな簡単に偶然に合わせてくれはしないだろう。

ぐるぐると考えながら、無意識に彼の服の裾を掴んでいた

「八神さん？」

突然掴まれ困惑している。

何か言わねば。本日もお日柄が良く？何処の誰だ。

ご趣味は？お見合いか！

そんな風に考え、考え、うちの口から出た言葉は

「あなたが、好きです！うちと付き合って下さい！」

何を言うとんねんうちは…

八神はやての初恋事情

「最近はやての様子がおかしい」

そう切り出したフェイトちゃんに私も同意する。

私たち機動六課の部隊長である『八神はやて』

最近の彼女は何処か上の空。仕事のミスが目立ち、よくリインに心配されているのを見かける。そのたびになんでもないと言う彼女ではあるが

「あれはやっぱり何かあったよね…」

私たちだけではなく、シグナムやヴィータちゃんも気がついているだろう。まぁ彼女達の場合は魔力パスで繋がっているのでそちらで気がついた可能性もありそうだけど…

「あ、はやてだ」

噂をすればなんとやら。フェイトちゃんが見ている方にははやてちゃんがいた。

件の彼女は窓の外を眺めて…、違う。

はやてちゃんはチラチラと電子端末を、何かを確認するように何度も見ている。なんといいますか、まだかまだかと待ち続けるその姿はまるで…

「はやてちゃん恋してるみたいだね」

なんて呟いてしまう。

ふとフェイトちゃんに視線を戻すと、ジト目で見られていた。

「他人事のように言うけど、なのはもユーノに恋してるでしょ…」

「にゃはは…」

否定はしない。私、高町なのははユーノ君に恋をしている。この気持ちを意識し始めたのは大分前であるが…

「今は私のことよりはやてちゃんのことだよ、フェイトちゃん」

「確かに…，あんなはやて初めて見た…」

少し、羨望の眼差しではやてちゃんを見ているフェイトちゃん。彼女はまだ、恋を知らない。甘く、淡く、脆く、切ない気持ち。それでいて心が落ち着き温かくなるそんな気持ち。心の中でフェイトちゃんにもいつかは相手が出来るのであろう、その時が来たら精一杯からかって、精一杯相談に乗ってあげよう。私はそう心に決め、はやてちゃんに視線を戻すと

「……」

顔を真っ赤に染めながら、自室に駆け込むはやてちゃんが見えた。

まだ仕事あるんだけどな…

「私はなんちゅーことをしたんや…」

いや、自身がしたことは分かる。人生初の告白だ。
問題は何故あの時、あの場所、あのタイミングで告白してしまったのか…

「抑えきれへんとは思わんかったで…」

はぁ、とため息とともに言葉を漏らす。恋は盲目とは言うが盲目にも程がある。市街地で、ど真ん中で愛を叫ぶなんて何処の映画だ。ある意味では世界の中心で有るために映画まんまではないか…。
うがー、と頭を抱える。恋愛について悩むなんて何処の乙女だ。いや、まだ年齢的には乙女だ、乙女である。

「こんなん…私のキャラちゃうやん…」

恋に恋していた頃とは違う、本物の恋。
それが私の心をどうしようもなく乱して行く…

「あかんあかん、気分転換や。甘い物でも食べにいこ…」

誰に言うでもなく、一人つぶやき通路を歩く。
ふと、端末に目を落とすとメールの受信を知らせる表示があり

『ｆｒｏｍ：神楽悠人』

「にゃー!!!」

またしても私の心は乱れて行く…

『返信遅れてしまい、申し訳ありません。少し仕事がゴタゴタしていたので連絡を取る機会がありませんでした…
八神さんは現在お仕事中でしょうか？だとしたら、お忙しい中申し訳ありません。
もし今後お時間が取れるのであれば一度会うことは出来ないでしょうか？
お返事お待ちしております』

待ち焦がれていた相手からメールが届く。たった一通のメールで心が満たされて行く。
メールを何度も何度も見返す。そして私はある考えに至った。

（もしかしてこれはデートとやらでは…？）

ボン！

顔から蒸気が噴出する。実際噴出していたら『ミッドチルダ面白い人間グランプリ』に出場出来てしまう。
ベットにダイブして、慌てて次の休みを確認する。幸いにしてここ最近は狂った紫髪の変態もおとなしく、余裕がある。何時にしようかなーと、自然と緩む頬で返信の内容を打ち込んで行く。

『メールありがとうございます。
現在は休憩の時間でしたので、迷惑なんかじゃありませんよ。
お仕事がお忙しそうですが、体調は大丈夫でしょうか？
なんて、少し心配をしてみたりします（笑）

会う日取りですが、可能であれば明後日なんて如何でしょうか？もしよろしいのであれば、クラナガンにある犬の銅像付近で待ち合わせでよろしいでしょうか？

返信お待ちしております』

ニヤニヤしながらメールを返信する。

待ち合わせの予定まで立ててしまうなんて完全にデートではないか。

「待たせましたか？」「ううん、私も今来たとこですよ」

なんてテンプレもあるかもしれない…

「乙女や、完全に今私は乙女になっとる！」

キャーキャー言いながらベットでゴロゴロと動き回る自称乙女八神はやて。

そんな彼女が天井の隅に潜むサーチャーに気がつくことは遂に無かった…

八神はやての外出事情

「パンツルック!?ダメだよはやてちゃん！せっかくのデートなのにそんな格好で行くなんて！」

「いや、なのはちゃん…。デートじゃーないよ？」

「スカートと合わせるなら…、はやてはスタイルもいいしこれなんてどう？」

「フェイトちゃんそれ露出高すぎやあらへん？北半球モロだしとか…」

結論。

ばれました。

ゴロゴロと至福の時間を過ごしていたわけですが、突如開け放たれた扉に私は驚きフローリングにキスをすると言う自体に陥りました。

そんな事になった元凶は今私を着せ替え人形にしている二人でありまして、まぁサーチャーで全部見られてたっちゅー訳です。何故気がつかなかった私は…！

浮かれすぎて恥ずかしくなる…

それからどれ位時間が過ぎただろうか、窓からは夕陽が差し込みカラスが鳴いている。
カラスが鳴いたら帰るんやで…
なんて考えが伝わったのか二人は私の服を選び終え、満足そうに帰って行った。

「全く…、大きなお世話やねん」

二人の気遣いに苦笑しながらも、選んでくれた服を見る。
露出も少なく、大人しめな服。下はスカートで女性らしさをアピールしていくスタイル。らしい…

「二人とも私のことよりも自分の事を考えればええのに…」

何てことは当然二人には言えない。特にフェイトちゃんには絶対言えない…

遊んでいたわけではないが、溜まってしまった仕事を片付けなければならない。
デスクに向かい、書類を整理していると彼からメールが届いた。

『夜分に失礼します。もしかして起こしてしまったでしょうか?』

ふと、時計を確認するともう日を跨いでいた。
律儀に挨拶から始まる彼のメールの続きを読む

『待ち合わせの件は大丈夫です。
時間の指定がありませんでしたが昼頃でよろしいですか?
個人的な意見で申し訳ないのですが、評判のお店に行ってみたいので、宜しければ八神さんも御一緒しませんか?』

「完璧にデートやこれ！」

ひゃっほい！と携帯を手放しながらクルクルと回る。

お昼に待ち合わせして、ご飯食べる。これはもうデートに違いない。

とても短絡的な思考ではあるが、私の中ではデートに決まった。

ただ一つだけ、とても気がかりなことがある。

ーー返事は、少し考えさせてもらえませんか？

私はまだ、告白の返事をもらっていない。

流れからして、出掛け終わった時にでも、恐らく返事をするのだろう。

もしも、もしも振られてしまったら？

（まぁそん時はそん時やなー）

そんな考えを頭を振って払う。

初恋なのだ、人生に一度だけの経験なのだ…。

初恋は実らないとは良く言われている。だからといって簡単に諦められる程私の初恋は簡単ではない…

でも、それでも心の何処かでは…

不安に胸が押しつぶされそうになる。誰かを好きになることがこ

んなにもくるしいものだなんて知らなかった

「神楽さんに初めてのことを教えてもらってばかりや」

不安でもあり楽しみでもある明日のデート。

申し訳ないが返信は朝方に送ることにして、今日はもう寝るとしよう

あっという間にデートの当日となった。

まぁ一日なんて直ぐに過ぎるもの、昨日もなんら変わりなく過ぎて行き、時間はそろそろ午後の１２時になる頃である。

二人がコーディネートしてくれた服に身を包み、待ち合わせ場所に向かうと

（おった！）

見る人が見れば地味であろう服に身を包み、銅像前で時間を確認している彼を見つけた。

心臓がとても早く動く。

あぁ、やはり私は彼のことが好きなのだ。改めて感じたその気持ちに嬉しくなる。

はやる気持ちを抑えながら「神楽さん」と声をかけ階段を下り

「「あ」」

盛大に転けた。

「いったいなぁー…」

盛大に転けてしまい、痛みが余り無いことに気がつく。

はて？何か下敷きにしている気がする。

何かに触れている右手を動かすと何やら柔らかな感触？なんやろこれ？右手に視線を落とすと股の…付け根？

まさか！と思い正面を見ると

「あーその…、大丈夫ですか八神さん」

彼が私のスカートの中に頭を突っ込む形で、彼が喋る度に息がかかりくすぐったく……え？

スカートの中に？頭を？神楽さんが？頭のスカートの中の

「え？」

真っ赤に、これでもかと言う程真っ赤に顔が染まっていく

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

慌てて神楽さんから立ち上がる。
立ち上がる際に右手でナニかを少し押してしまった気がするがそれどころではない。
だから、敢えて叫ばせてもらおうか…
「こんなんトラブルやなくてＴｏ　ＬＯＶＥ〇や！」
神様ってやつは本当にいじわるやー!!

続：八神はやての外出事情

「ほんまに…、お見苦しい物をお見せしてしまい申し訳なく…」

「いえいえ、受け止めるつもりがあんなことになるなんて思いませんでしたし、八神さんが謝る必要なんて無いですよ」

「……見ました？」

「……少しだけ」

死にたい。
初恋の
相手にぱんつで
ダイビング

（死にたい…）

顔真っ赤や…。
何が悲しくていきなりとらぶるしなきゃならんのや…
しかも男性のナニに迄触ってしまい…

「八神さん？顔すごく赤いですけど、体調が優れなかったりしますか？」

「ひゃい!?だ、大丈夫です！」

あかん、恥ずかしくて顔も見れへん
慣れない格好なんてするんじゃなかったと、軽い後悔に襲われながら、神楽さんがお勧めだと言うケーキを一口

「あ、美味しい」

「お気に召したようで良かったです」

何でも話を聞くとこのお店、地球にある有名店のレシピを再現しているのだとかなんとか。話をしていてくれたが少しばかり私はケーキに夢中になってしまい馬の耳に念仏状態であった

「凄い美味しいですね、ここのケーキ。お勧めするだけはありますわ…」

「僕は食べるのは二回目ですけど、これなら何個でも入りそうですね？」

一度目は誰と来たのだろうか…

そんな考えがよぎる

聞けたらどれ程楽になるか、でも私は臆病だ。

「そーなんですかー。帰りにお土産買ってかなあかん思うてたんですけど、ここのケーキにしますわ」

聞く勇気も無い。切り出す勇気も無い。

おかしいな…、私はこんなにも弱かっただろうか

「持ち帰り専用のケーキも有るみたいですし、お土産にするのもありでしょうね」

笑いながら告げる彼から、いつ切り出されるのかと怯えながら会話を進めていく。

「…八神さん」

「は、はい？なんでしょ？」

突然、彼の腕が此方に伸ばされ
むにー
と頬を伸ばされた。

「八神さん、ほっぺ柔らかいですね。気持ちいいです」

「……ふぇ？」

「思い詰めたような顔をされると、こちらも中々辛くなるんですよ？」

何と言うことか、顔に出ていたようである。
ポーカーフェイスは得意だと思っていたが、相手に気を使わせてしまうなんて、私もまだまだ子供である

（と、というか！触られてます！はやてのほっぺが蹂躙されております！）

むにー、むにーと蹂躙されていくほっぺ。
如何せん、惚れた相手に触れられていると言うだけで抵抗の意思は薄れ、されるがままになっている。
心の中では拍手喝采状態で照れながら笑っていると

「八神さんを見ていると、友達の妹を思い出します」

神楽さんが喋ったその言葉に、ズキリと、胸が痛む

「最近は余り連絡を取っていないのですが…、げんきにしているで

しょうか？」

神楽さんにとって

（恋愛対象として、見られとらんのかな…）

先程は崩れたポーカーフェイスを今度はしっかりと維持し笑い返す。

妹か…

心が痛い、胸が苦しい…

「あ、すいません。何時迄も触れているわけにもいきませんね」

離れていく手。

頬にはまだ、神楽さんの体温が残っている気がする。

何時もの私なら心の中で万歳状態なのだが

（妹扱いはなぁ…、辛いなぁ…）

そう考えてしまうと、虚しくて、悲しくて、やっぱり初恋は実らないんだなと思ってしまう

雰囲気が変わったのを察してか、神楽さんは申し訳なさそうに苦笑している。

そのまま、すこしだけどちらも喋ることは無かった

神楽さんがご馳走してくれて、店を後にするが、その足取りはとても重い。
いっそこの重たい足で走り出して逃げてしまいたくなる。
でも、そんなことをすれば神楽さんを困らせるし
(そのまま疎遠になるのも嫌やなぁ…)
まだ諦められない心が、どうしようもなく憎い。
神楽さんの横顔が、ふとした時に零れる微笑みが、あなたの事が大好きなのだ。
(こんなにも私は神楽さんの事を想っているんやけど…、一方通行か…)
などと、完全に発想がネガティブに染まってしまった。
「すこしだけ、私に付き合ってもらえませんか?」
「え、あ、はい」
突然の神楽さんの提案に、私は無意識の内に返事を返す。
先導されたどり着いた場所はなんてことは無い、ただの公園。
「待たせてしまって申し訳ないのですが、告白のお返事をさせてもらいます」
その言葉に、私は余り焦ることは無かった。
何たって妹扱いみたいにされているのだ。彼女ではなく、妹。
(帰ったらなのはちゃんとフェイトちゃんに慰めてもらおうかな)

何てことを考えながら私は彼の言葉を待つ
夕焼けを背景にしているせいか、私からは彼の顔はよく見えない。
だが彼のことだきっと私を振ることに対して申し訳ないような顔をしているに違いない。

(なんやあれやなぁ、神様はやっぱりいじわるなんやな…)

なんて事を考えていると、彼が口を開いた

「八神はやてさん。
ずっと前からあなたの事が好きでした。
私とお付き合いして下さい」

頭を下げ、手を差し出す彼。
一方の私は

「……え?」

思考が追いついていなかった。
え、私振られるんとちゃうの?何で告白されてんの?
と言うか私固まってる場合じゃないやん。
よく見ると彼の手は少し震えていて、それを見て私は少しだけ落ち着き。ゆっくりと彼の手を取る。

「わ、私で宜しければ、宜しくお願いします」

声が震えている。視界が霞む。
神様、意地悪とか言ってごめんな?
世界はこんなにも幸福で満ちているんやね…

「断られなくて、安心しました」

そう言いながら彼は頬をかく。

「断るわけが無いやないですか、私から告白したんですよ？それなのになんで神楽さんが告白してるんですか？」

涙目で、笑いながらそんなことを質問する。

「そこは、なんと言いますか…。男の見栄です。女性からの告白ではなく、男性から告白するのが筋な感じ、しません？」

嬉しい、嬉しい、嬉しい！

彼に想いが通じ、彼の想いが通じる。

初恋が実った瞬間である！

でも、そうすると少しだけ疑問が出て来てしまう。

「私、神楽さんに妹と見たいに見られてると思っとったんですよ？ケーキ屋であんな風に言われるし…」

「ご、ごめんなさい。私、余り女性と接したことが無くて、どんな感じに接すればいいのかわからなくて…。

ふと浮かんだのがその、友達の妹の事だったんです…」

最後の方は小さな声で言われてしまい、何だかそれすらも愛おしくかんじてしまう。

「その妹さんってどんな感じの方なんですか？」

「先程も言いましたけど、最近は余り連絡をとっていないんです。彼女の兄が生きていた頃はよく遊んであげていましたね…」

その言葉に、まさかと思いながらも一人の女性が思い浮かんだ。

「恐らく、最近の彼女については、八神さんの方が詳しいのかもしれません」

あぁ、やはりである。兄を無くした妹、よく聞くようなお話ではあるが飽くまでそれは創作の中で。でも私の近くにはそんな境遇の彼女がいる

「その人って、ティアナのことですか？」

ティアナ。その言葉を聞いた彼は、悲しそうに頷き、告げた。

「はい。ティアナは、私の友人であったティーダの妹で、私にとっても、妹のような存在でした」

神様、やっぱり世界はややこしいわ

神楽悠人の恋愛事情

彼女に初めて会ったのは、仕事でゲンヤさんのところに呼ばれた時だった。

その時は同じ日本人という位しか意識はしておらず。こんな場所にいるなんて余程魔力があるのだろうと、少しだけ嫉妬してしまった。

後日、改めて仕事の話をしにゲンヤさんのところに行く。

受付で連絡をとってもらい、ゲンヤさんが来るのを待っている時、八神さんの事を噂しているのが聞こえた。

なんでも八神さんは犯罪者らしい。いや、決めつけるのも悪いとは思うが「火のないところに煙は立たない」だったか、そんな諺があるくらいだ。きっと昔何かあったのだろうと結論ずける。

なんて、少しだけ、八神さんの事が気になってしまった自分に少しだけ驚く。

まぁ、この仕事が終われば八神さんに会うことも無く成る。気になる気持ちはきっと気の迷いであろう。

うんうんと、一人頷いているとゲンヤさんが此方に向かっていたので、気持ちを切り替え仕事の話をしてその日は終わった。

ティーダの妹であるティアナに、就職祝いに何かプレゼントでもしようとクラナガンに来て見た。

年頃の女の子に贈るプレゼントなんて、何を贈ればいいのやら。デ

バイスを持っているのでそちらに関連する物でも贈ろうか…？そう考えるとデバイスにアクセサリー…。いや、ありなのかもしれない。ティアナだって女の子なのだ、オシャレの一つや二つしても可笑しくは無いだろう。

雑貨屋に入り、店員にその旨を伝えると苦笑いを浮かべながらも選んでくれた。こういったものは店員に、それも女の子に贈るものならば女性の店員に選んでもらうに限る。

我ながらいい判断だ。

プレゼント用に包んでもらった物を受け取り、少しだけ店員と話をしていると、何だろうか。

「お客様、なんかすごい睨まれてますよ？」

そうなのだ、先程から何故か視線を感じるのだ。

少し立ち位置を変え、鏡で背後を確認して見ると、その、なんだ

（何故睨んでいる、八神さん…！）

世間一般で言われている、ジト目とやらで此方を見ている彼女がいた。

果たして自分が何かをしたのだろうか？考えて見るが思い当たることは何も無い。ならば何故睨まれるのか…

そんな自分の考えを店員さんがわかるはずも無く。

でも彼女は何かに思い当たったかのように微笑み、何故か手を振っていた。

何故…？

プレゼントを購入した日の夜。ティアナに就職おめでとうと言う激励混じりのメールを送る、が

「待てども待てども返事は来ず…」

嫌われているのだろうか…

もしかして自分は女性に知らず知らずのうちに何かしてしまっているのだろうか、何て考え迄頭に浮かぶ。

どうにも最近は悪い方に考えがいってしまう。これはいかん。熱いシャワーでも浴びて心身共にさっぱりしようと立ち上がると同時に端末が震えた。

「FROM：ティアナ」

その名前を確認し、安堵する。どうやら親友の妹には、少なくとも嫌われてはなさそうだ。

返信をする前に、シャワーを浴びるとしよう。

シャワーを浴びている時に、ふと八神さんの事が浮かんだ。

彼女と会う機会はゲンヤさんを介して、一度だけあったことがあることを思い出した。

「いや待て、確かその前にも会った事があるはずなんだけど…」

薄れかけている記憶を掘り起こす。

何処で会ったのだろうかとしばし顔にお湯を当てながら考え、思い出す。

会ったといってもテレビ越しの事だ。

少し前に空港で火災事件が発生した。現場のアナウンサーが興奮しながら喋っているその後ろに、確か彼女はいた。まだ幼さの残る顔

立ちで、それでも自信の持った顔立ちで。消化作業に多大な貢献をした彼女。背中には何故か羽を生やし、神々しく、美しく思えた彼女。
その姿に見惚れていた当時の自分もまだ若く、何時かは自分もテレビに出演し、人気者になってやると意気込んでいたのを思い出した。

シャワーを終えティアナになんて返事を返そうか悩む。
『悠人さん。お久しぶりです。
気を使わなくても良かったと、言いたいところですがありがとうございます。
プレゼントまで買ってくれたとの事ですが、これまでの悠人さんのセンスを思い出すに今回も少し的外れな物を買ったのでは無いかと今から不安になっています。
最近は気候が安定せずに温度差が続くこともあります。
体調管理には気をつけてください』

何であろうか。自分よりも年下の筈なのに、自分よりも社会的なメールに笑ってしまう。
……しかし私はセンスが無いのだろうか。
「たぬきのストラップ、可愛いと思うのにな…」

またある日、クラナガンに赴く。
今回は結婚式の仕事の打ち合わせのため、会場を一度視察してきた。
ただ、なんだろうか。胸に残る虚しさは…

新郎新婦共に二十歳。一方の私は２５。
辞めよう、これ以上は考える度に心にダメージを負ってしまう。甘い物でも食べてから帰ろうと、何時の間にか立ち止まっていた足を動かし、見つけた
ナンパ男である。
なんと言うか古代の遺産を見つけた気分だ。いや、単純に私の周りでこういった事をする人がいないだけ、遺産扱いするのはお門違いであろう。
しかし、珍しいものを見たのも事実。相手の女性はどんな顔をしているのかなと、背伸びして確認し

「またあなたか八神さん」

…最近よく八神さんを見かけることが増えた気がする。
彼女はナンパに困った様な顔をしていたが、まぁ自分には到底関係のない事である。踵を返し、今来た道を戻ろうとしたところ、整った顔が歪んでいるのがみえた。
それを見たとき、何故だろうか。私の心に少しだけ怒りが湧いた。

「わ、私の連れが何かしましたでしょうか？」

気がつくと声をかけていた。
何をしているんだ自分は！と思うがもう遅い。ナンパ男が何かを言って来るのだろうかと思ったが、意外なことに彼はすんなりと去っていった。
ホッとし、八神さんの様子を確認すると何だか嬉しそうな顔をしている。はて、そんなにナンパ男がいなくなったことが嬉しいのだろうか？
それから、ティアナに接するように。単純に女性との接し方がわからないからそういった接し方になったのだか。頭を軽く叩くようにしていると、八神さんの反応が消えた。

流石に、関わりの全くないといってもいい私にこんな事をされるのは嫌なのだろう。

(嫌われたかな…)

そんな考えに少しだけ心が痛み、何故だろう?思う。

結論、糖分が足りないと思い至り、場を去ろうとしたら袖を掴まれた。

何であろうか、気安く触れたことに対する仕返しでもされるのであろうか。それともセクハラされたと訴えられるのであろうか。……それだけは避けたいところである。

困惑し、次のアクションに戦々恐々していると

「あなたが好きです!うちと付き合って下さい!」

告白された。

告白された?

告白されたの?

誰が?誰に告白?

その後の記憶はほぼない。気がついたら家におり、着替えも済まして食事を口に運ぶところであった。

何だろうか、夢でも見ていたのかなと思うが

(告白されてしまった…)

鮮明に覚えているその言葉、八神さんの表情。

そして自分が返事を先延ばしにしていたことに、頭を抱えることになった。